

久米島海洋生物合同調査「KUMEJIMA2009」成果報告

昨年11月に久米島において行った「久米島海洋生物合同調査 KUMEJIMA 2009」より、少なくとも 51 未記載種 74 日本新記録種が得られている事が分かったため、この結果を県内外に公表した。

「KUMEJIMA 2009」は、7 カ国17 研究機関の研究者や学生 50 名以上からなる国際チーム(代表、成瀬貴 琉球大学 亜熱帯島嶼科学超域研究推進機構 特命助教)により行われた国内でも稀に見る規模の調査で、2週間にわたり久米島周辺海域の海産底生無脊椎動物を採集対象に実施された。本調査により非常に多くの発見が得られた要因として、様々な動物グループの専門家が一同に介し、潮間帯から水深 600m まで網羅的に調査を行うことができた点が挙げられる。また、たった2週間の久米島周辺という限られた海域の調査よりこれほど多くの発見が得られるという事は、1,200km に渡り広がる琉球列島の海洋生物の生物多様性がいかに把握されていないかを暗示している結果でもある。



「KUMEJIMA2009」で採集された未記載種・日本新記録種の一部

■久米島海洋生物合同調査 – KUMEJIMA 2009 の概要

- 1) 期間：2009年11月8日～22日
- 2) 研究体制：本調査は、琉球大学の亜熱帯島嶼科学超域研究推進機構、国立台湾海洋大学の水産生物科技頂尖中心、ならびにシンガポール国立大学の Raffles Museum of Biodiversity Research の三研究機関間で取り交わした共同研究協定を元に行われる国際共同研究である。現在までに7カ国17研究・関連機関より総勢50人以上が参加して行うことが決まっている。上記三研究機関以外に本調査に参加・協力、研究員・学生を派遣する国内の研究・関連機関は、以下の通りである：沖縄美ら海水族館（沖縄県）、海洋深層水研究所（沖縄県）、千葉県立中央博物館 分館 海の博物館（千葉県）、北海道大学（北海道）、北九州市立いのちのたび博物館（福岡県）、NPO 法人 海の自然史研究所（沖縄県）、広島大学(広島県)、Tsudoi Company (沖縄県)、等。

さらに、本調査は久米島町漁業協同組合の組合員や久米島町教育委員会、地元ダイバーの方々に多大な協力をうけて実施された。

- 3) 研究内容：本調査では、久米島周辺海域において、海洋生物の標本を収集することにより、同海域における海洋生物の種多様性を解明することを目的とした。また、研究活動を通し、国内外の各研究機関および地元行政・市民などとの連携を強化し、亜熱帯島嶼域における海洋生物の生物多様性研究拠点の形成も目指した。

■久米島海洋生物合同調査の成果

「KUMEJIMA2009」で採集された標本は、動物グループ毎にその専門家のもとに送られ、現在進行形で研究が進められている。その結果、現在(9/16)までに、甲殻類(エビ・カニ・ヤドカリ類等)や、軟体動物(貝類)、棘皮動物(ウミシダ類)などから、**51未記載種**と**74日本新記録種**が確認されている。ここで、日本新記録種とは、日本から初めて分布が確認された種(今まで海外からのみ知られてた種)のことである。この調査中に得られた海産無脊椎動物の総合計種数等は、種同定(種名を調べる)が現在進行中のためまだ得られていないが、同定を終えていない標本の中にさらなる未記載種や日本新記録種が含まれている事が容易に想像できる。

なお、本調査の結果の一部は、2010年11月12日～14日に琉球大学で開催する、日本甲殻類学会第48回大会でも報告される。

■調査の意義など

1) 共同研究チームの意義・海洋生物標本を収集する意味

今回の調査では、7カ国17研究・関連機関より総勢50人以上の研究者が参加して研究を行った。これらには、海洋生物の代表的なグループである甲殻類、軟体動物類、魚類、棘皮動物類等の専門家が含まれており、国内では他に類を見ない規模の調査体制となった。多数の専門家が調査に参加することで、速やかな研究の進展が期待できる。特に、琉球列島の海洋生物は、当然台湾や太平洋諸国との関連が強いため、それらの国々の研究機関との合同調査は、記載研究を迅速に進める上で極めて有効である。

本研究で得た海洋生物の標本は、琉球大学をはじめとする各研究機関に保存される。代表的な種については地元の博物館（久米島自然文化センター）などにも保存することも考えている。琉球列島の海洋生物の標本を地域の博物館などが包括的に収蔵することは、生物多様性研究を進展させる重要な要素である。また、本研究で得られた生物多様性情報は、潮下帯の環境改変を伴う公共事業や開発に際し行われる環境アセスメント等に比較対象を与える基礎的情報として社会的にも有用なものとなる。

2) 「生物多様性」研究の実際

また近年、「生物多様性」という言葉が一般にも浸透しはじめ、その重要性や保全の必要性が少しずつ認識されるようになってきた。特に、2010年10月には、生物多様性条約第10回締約会議（COP10）が名古屋市で開催されることもあり、「生物多様性」は、おそらく、自然・環境分野において今後最も耳にする（目にする）言葉の一つになるだろう。しかし、その一方で、琉球列島の種多様性を解明しようとする研究者（特に分類学者）の数や、その研究活動への理解・サポートはとても少なく、まだ「名前」すら付いていない種が多数存在しており、我々の「生物多様性への理解」がいっこうに進んでいないことは意外と知られていない。実際、久米島周辺と言う限られた海域でたった2週間実施した「KUMEJIMA2009」からこれほど多くの発見が得られるという事は、1,200kmに渡り広がる琉球列島の海洋生物の生物多様性がいかに把握されていないかを暗示している。気候変動や環境改変による生物多様性の低下が懸念されるなか、その「多様性」自体の把握は、多様性保全に必要不可欠であり、地道に続けていかなければ行けない研究分野の一つである。